

あぼしまち交流館歴史講座では、年に1回外部講師をお招きして講演会を開いている。今年度は4月13日に、伝統工芸塗師の岡田道明先生をお迎えして、塗師の道に入りたいきさつから、書写塗と竹田塗の復元、仏壇や仏像の修復、寺院立花などについて実際の作品や写真をもとに、分かりやすく教えていただいた。

岡田先生は高校卒業後、溶接やインテリアの仕事の後、仏壇屋で6年間勤めて修復も任されるようになった。40代で文化財修復の武者修行に出、寒い時期の姫路城の漆の下地も塗られた。マイナス零度では漆が乾かないという絶体絶命のピンチも、よく乾く漆を手に入れることで乗り切られたそうだ。

書写塗の復元は姫路市食文化協会から声がかかった事業で、書写山を訪れた特別な方々におもてなしをするという格式膳を、文献に基づいて復元したものだ。今の日本の漆器は日本産の漆を使っているのはわずか7%で、大部分は中国製やフィリピン製であるが、書写塗の漆はすべて日本産で、朱色が魅力的である。石に含まれる辰砂を抽出して作られる朱色は、長寿や魔除けの願いにつながるという。この石も実際に見せていただいた。木を寝かせる所から始まり、麻布を貼り、中塗りや上塗りという丁寧な工程を経て、出来上がる書写塗の椀は書写山の紋を入れて、長寿椀として35000円で売られている。実際の工程ごとの椀を間近で拝見させていただくと、その素晴らしさがよくわかった。

竹田塗はもともと中世の領主であった太田垣氏が漆器文化を根付かせ、その後大量に作って大阪や堺に売られていたが良く割れたりしたらしい。明治になって京都から技術が伝わり竹田塗の復活につながった。竹田塗の漆は丹波産である。しかし書写塗も竹田塗もそれだけでは食べていけないのが現実である。

そのため仏壇や仏像の修復の仕事も行っているのも、塗師でもあるし、仏師でもある。仕事は深夜にお経を聴きながら行っており、仏様の力をお借りして生きているといえる。鎌倉時代の薬師如来の修復を、漆の技術で行ったり、江戸時代の浄土宗の仏壇を修復したこともある。その中で感じるのは江戸や明治の職人には絶対勝てないなということだ。しかし手仕事を意地でも残していきたいという気持ちで行っている。

報恩講の時に、この近隣の龍源寺や永念寺などで立花も行っているのも、池坊の華道家でもある。これは父親から受け継いだもので、山で木を調達するところから始まる。このようにいろいろな仕事をしているが食べていくのはギリギリである。今日は何でもすぐできる時代であるが、それとは対極の、気持ちを込めて時間をかけて物を作ることをできる限り続けていきたいとの言葉に感銘を受けた。

網干歴史講座会員 浜田 中川千里

